



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



木のせん定をする水田さん

イリタマモクケヤキの種と葉

木肌に玉があるイリタマモクケヤキ

イリタマモクケヤキの

増殖に取り組む元気人

日高地域で、イリタマモクケヤキの増殖活動を長年行い、その木を市内外の公共施設や寺社などに寄贈する元気な男性を紹介します。

水田喜太郎さん(93歳)日高町観音寺

2世を残し、但馬の銘木に

「木肌の玉が見えますか。このケヤキは、ほかのケヤキとちよつと違います」と話すのは、約30年間、イリタマモクケヤキの増殖活動を行っている水田喜太郎さん。

戦後、日高中部土地改良区のは場整備などに携わっていた水田さんは、その後、日高林業研究グループに加入し、昭和48年に県の林業研修会でケヤキの講演を聞き、その中でイリタマモクケヤキを知りました。

この木は、ケヤキの中でも数10万本に1本しかないといわれ、木肌に無数の玉状の小さな穴が現れるのが特徴で、製材すると、光の方向によって玉のような模様が浮かび上がります。幹回り約3メートルのこの木は、以前、木材市場で高値で取引されたともいわれ、また、京都の東本願寺の門扉にも使用されています。水田さんは「約55年前に自宅の山に竹を切りに行ったときに、『木肌の変なケヤキがあるな』と思っていましたが、まさかそんな木だったとは知

りませんでした。当時は『何とか2世を残し、但馬の銘木にしたい』という思いでした」と振り返ります。

玉が出て

うれしくて万歳

2世の育成は、まず、10月中旬に落下した実を集め、種を取り、翌年の春に種をまきます。夏の発芽を待つて、長さが約30センチメートル、幹回りが鉛筆ぐらいになると、母樹の枝を取つてきて接木し、育成します。

水田さんは「接木は、但馬牛の飼育で得た交配の知識を生かし、近親交配することで良いものができました。また、長年取り組んでいると、実の収穫量の違いに気付きます。8月に雨が降らない年は、翌年にたくさん実をつけます。それは、木が養分が少なくなる」と子孫を残そうとする生理現象だと思えます」と話します。そして、一番感動したときの様子を「木肌に玉が出るまでは、まだその木なのか分からないので、16年目に玉が出たときは、うれしくて、万歳



▲イリタマモクケヤキの増殖活動を行っている水田さん。趣味は、木札作り、書道、ゲートボール

をして喜びました」と満面の笑みで話します。

100本の植樹を目指す

これまで、水田さんは、市内外の公共施設や寺社など約60カ所と個人に計約300本を寄贈してきました。

平成17年の全国育樹祭では、全国育樹活動コンクールの個人の部で農林水産大臣賞を受賞し、皇太子さまから「3世代に及ぶとも但馬の銘木を完成してください」との言葉を授けられました。

水田さんは「現在、自宅の山に80本植樹していますが、死ぬまでに100本の植樹を目指し、ピンピンコロリ(病気に苦しむことなく、元気に長生きし、病まずにコロリと死ぬ)でいきたいです」と話し、木のせん定をしていました。

広報マンがやってきた!

幼稚園編

2

高橋幼稚園

(但東)

〈園児4人〉



市の最も東側に位置する高橋幼稚園は、山々を背に、オオサンショウウオが生息する出石川のせせらぎが聞こえる自然豊かな場所です。

2月2日、季節の行事「節分の豆まき」が行われましたので、その様子をのぞいてみました。

節分ってなあに?

「豆まきが始まると、鬼はびっくりしたようで」と、先生が、絵本を読みながら節分の日に行う豆まきの話をしてくれました。



先生が「鬼の嫌いなものは何か知ってる?」と聞くと、園



児は「ヒイラギ、チクチクするから」「イワシ、においが臭いから」と元気に答えます。

すると、先生が「大豆も苦手なんだよ。大豆は栄養満点で強いから、鬼に負けない力があるんだよね」と話すと、園児は興味津々。また1つ賢くなりました。

怖い鬼のお面も

いろんな表情、楽しいな!

豆まきの前に、鬼のお面を準備します。古封筒に色を塗り、色紙で目、鼻、口をかたどって貼り付けます。



園児は「鬼の目、でかすぎ!」などと言いながら、

楽しそうに、怖い(?)鬼のお面を作りました。

心の中の鬼を退治!

豆まきが始まりま



した。園児は交代で鬼になりながら、心の中にいる鬼を退治します。「寝ぼすけ鬼」「夜更かし鬼」「野菜を食べない鬼」、

「小声になる鬼」と、いろいろな鬼が退治され、園児からは自然と笑顔があふれます。



強い体になりますよ!

「年の数よりも1つ多く豆

を食べると、病気をしないといわれているんだよ」と先生が話すと、園児は、固くてもおいしい豆をぼりぼりと食べました。「強い体になりますように!」



笑顔の輪

いろいろなことをやってみたい!

『ちえのわ』(日高)

平成18年4月から、国府地区で活動しているグループ「ちえのわ」は、8人のメンバーで構成されています。

毎月1回、全員が知恵を出し合って決めた内容を、それぞれが得意分野の講師となり、メンバーに伝授しています。この会の主な活動は、食材や不要となった物品などを持ち寄り、工夫していろいろな物を作ることです。材料にはなるべくお金を掛けずに、身近な物・廃品などを利用する、それがエゴにもつながるといいます。



▲初めて挑戦する「大正琴」

これまでの成果を挙げてみると、手作りみそ、ゴキブリ団子、古着を利用した草履、新聞折込チラシで作ったかごなど、食べ物から生活必需品まで、時には習い事したりと盛りだくさんです。中には、赤と白の布ともみ殻で80個の紅白玉を作り、「運動会用」と小学校

へ寄付をして喜ばれたこともあります。公民館主導の「くらしの会」が前身のこの会は、地域に密着した活動を心掛けています。

会を取り組んだものを地域の方に教えたり、要請があれば、公民館主催の講習会や夏休み子ども教室などの講師を務めたり、積極的な活動もこなします。

代表の赤木多美子さん(日高町上郷)は「互いに知識を与えたり、与えられたりするの、自分の知らないことが身に付くことで得た知識を、近所の方と共に取り組んでみたり、楽しんで活動ができ、プラス面ばかり」と生き生きと話します。「おばあちゃんの知恵袋」とも言える「ちえのわ」は、朗らかに活動している最中も「次なる好奇心」を燃やしているに違いありません。